

地名の地理學的考察とその一例 (二)

小林 悟 一 郎

前述せる卑考を實際に扱はん爲め茲に一文を草するのである。而して豫め斷つて置かねばならぬことは先づフィールドのことである。(第一圖參照)

通稱する背振山塊と肥筑平野を取つたのである。これは筆者の最も親しめる地名であるばかりでなく、朝鮮との關係もあり、尙ほ山地性と平地性を論ずるに好個の地なるべく考へたが爲である。その四邊に就いては第一圖に示すが如く、東邊は福岡二日市から朝倉街道に隨ひて把木に至る街道に従ふ。南邊は耳繩山麓の百米等高線に隨つたが、この山脈の西端から先きは、主として地形より案じて更正した所もある。但し百米より高き所は絶對に加はつてゐない。而して三池郡は隈川までを加へて以南は域外とし

た。西邊も右の方法を採り鹽田川以南は武雄の盆地と共に除外したが、時に參照することあるを許してもらひたい。松浦川の谷では大體縣道に隨つた。

山地部と平地部との界は、百米等高線には依り得なかつたのである。山麓原ともいふべき地は、尙ほ平野に加へ難い所であつて、背後の「山」といふ條件に支配される所である。大約二十米線に近い結果になつたが、概略小城・千葉・鳥栖・本郷・依井を連ぬる線と考へて頂きたい。

枚舉した地名は五萬分の一地形圖に載つてゐるものといふことに範圍を採つた。縣廳に集録しある「字」に依らうかと考へたが、讀者の便宜から言つて好都合でもあり、地形を表示する

場合に利便であつた爲め、地形圖を基準とした。
「字」全部に就いては後日尙研究を續けて行き度
アザ



いと思ふ。總數は一千九百十個である。福岡・
久留米・佐賀の三市を始め町村の街區名は今度

地名の地理學的考察とその一例

は取扱はない。街區名には別に草すべき特色があつて、今處理する地名とは同じくしたく無いからである。それらは追つて稿を草する豫定である。

次ぎは前掲の分類項に隨ふことであるが、此の度はその一部、靜的自然と地名に就いてだけに止めたことである。即ちこの編は一例に過ぎないのである。實は全部この文に加へ度いのであるが、本文の主旨がその研究法を論ずるにある爲め、全部を掲げるは讀者の煩に堪えられな

いことを恐れねばならぬこととなる。故に今回は一部に止めて他は編を別にして發表したいと思ふ。圖葉の充分に揃はなかつたのは今後増補する積りである。

更に地理的原則を求めんとする場合にも、このフィールドに基ける論斷にのみ傾き、又筆者の短見低識を表明すること多かるべく、この點また世に問ふ動機でもある。讀者よく諒察あらんことを乞ふ。

自然地理學的地名

自然の大きいさ、その人文生活に及ぼす影響——物質的生活精神的生活に作用する自然を更めて云爲するは愚であらうが、自然は人類の棲家である。人類がその棲家の各部に如何なる稱呼を用ひたか、そこにも自然と人類との交渉を探られはしまいか、また聚落名として考へる時、聚落にまつはるすべての人類性が自然と如何に交渉してゐるかを探り得るならば、それは價値なきものであらうか。筆者はその間の要素を獨自の原則に依つて、一家言を試み様としてゐるのである。

第一自然地理的地名

一、靜的自然地名

靜的自然とは無生且不能動なる自然と言つて置いた如く、地質學地形學の對象になる自然の一部を指すが内外の營力として動くものは加へない。又これには位置を表はす詞をも加へて置く。

A 位置詞

地名は位置性を持つ。その位置を表示すといふことは地名の意義ある所である。位置といふ思想あるが爲に地名は生れる。地名の中その位置を示す言葉そのものが地名であるものを本項とするのである。この位置詞に就いては、地理的要素の探るべきものがあるので、二次限と三次限に分けて調べて見たい。

二次限

平面を表はす言葉は最も多い。これは一般の空間思想が平面を基礎としてゐることを明かに示す。東西南北、前後左右、横(脇、添)向、邊(端、末、際、寄、付、切、頭、方等)奥(沖)口内外等である。そして同じ位置を示すにも地方性がある様である。

a 東

本地域に於て、東を用ひるもの四十四の中十個のみが山地部に屬する。その中眞の山地のものは東背振(後世山名から取り來つた村名であつて聚落名としては例外とせねばならぬ)、東

河内（このアヅマは東方を示すものでなく四阿屋の河内の義である四阿屋は後述）東小河内の三つで之を除けば東組、東があるだけである。

フィールドに於いて筆者が數へた地名の數は、山地部に千百五十一、平地部に千七百五十九で山地部は平地の六十五%餘となつてゐる。このバーセンテージから見ただけにしても、兎に角東は山地部に少く平野に大部あることになつた。

幾部落かを入れ得る餘裕を必要とする方向詞が、山地部に少いのは當然でもあらうが、この背振山地なるものが南北に延長する谷の多い爲に一層東西の方向詞を制限してゐる様である。

併し一般には、東西の方向詞の方が南北のそれよりも多く用ひられるのである。之も方向の基準が東西、即ち太陽の出沒にあることを暗示してゐるのではあるまいか。東西は合して百一南北合して三十九である。特に聚落の縦横に發達し易い、そして方向詞の自由に用ひ得られる平地に於いて、この觀の深いことは右の考を強うするのである。

又かゝる方向詞は、二方相對する時、東と西南と北といふ様に互に對稱してゐるものと、然らずして原聚落などを基準として、それから呼んだ方向とがある。この後者の場合は聚落の新舊を明示してゐることとなり、引いてはその地方に於ける聚落の發達して行つた方向を探り得るわけである。東西對稱せるものと、然らざるものとに別けて、フィールドの「東」を列舉すると左の如くである。

（一）内は郡の頭字・即ち筑^ニ筑紫郡・早^ニ早良郡・糸^ニ糸島郡・東^ニ東松浦郡・小^ニ小城郡・佐^ニ佐賀郡・神^ニ神崎郡・三^ニ三養基郡・瀧^ニ三瀧郡・井^ニ三井郡・池^ニ三池郡・山^ニ山門郡・八^ニ八女郡・浮^ニ浮羽郡・朝^ニ朝倉郡＝は山地と平地兩部の別

A 對稱せるもの、即ち之に對して「西」を伴ふもの。

東隈（筑）・東入部・東油山・東（早）・東組（糸）・東分（小）＝
東山・東分・東宮裾・東郷（杵）・東西・東寺井・東八田・東高木・東淵・東中野・東神野・東新庄・東古賀・東南里・東山田（佐）・藤木東分・東大石（神）・東尾・酒井東・東分（三）・東宮永（山）・東都留・東開・東原（八）・東名（井）

B 對稱せざるもの

東小河内(鏡)東原(小)東背振(神)東河内(三)＝東島・東
名・東新地・東巨勢(佐)東野里(神)東洋(三)東屋敷(諸)
當條(八)

方向詞の用ひ方に東尾、東隈の如く上に附けるものと、酒井東、藤木東分の如く下に附く場合とがあり、B 級にしても東小川内の如く基準となつた地名を示してゐるものと、東屋敷の如くそれを示さざるもの又は略せるものがある。東高木の如きはその對稱は西でなく、上下の高木になつてゐる。

右に列舉した東西(佐)は、その部落を貫く路の東西にある部落の合稱らしい。八女郡の當條は一條などの東方に當るのである。東をアヅマと呼ぶは東河内一つで、あまり用ひられないことはこのフィールドのみでもない。トウとよむのは八女郡の東原二つ、小城郡の東原と佐賀郡の東巨勢であるが、八女のは對稱西原が各々あるし、東巨勢も巨勢の東にある。小城のも東の意に違ひないと思ふ。東松浦には唐原がある。

塔原らしくて、東でないらしいが、そう言ふものとの紛れはあることと思ふ。

b 西

これは五十七個を數へた中、山地部が二十四である。中でも西山(早)・西谷・西ノ浦・西堂(糸)・西宇土(東)・西野(小)は最も山地性のものである。東に比べて山地部の多いのは興あることと思ふ。山谷に於て西といへば東面せる傾斜地に當ることがこれを結果したのでないかと思ふのである。西入部・西山(早)・西谷(糸)・西宇土(東)・西晴氣(小)など皆東面してゐる。早良の西脇もそこに作地との關係あるとはいへ、かの東方山麓に寄添つた「野芥」の部落に對して、日射に恵まれてゐる。異例としては西原(小)・西ノ浦(糸)の様なものがあるが、併し少くともこの事實は山間に於ける聚落延長の關聯する所と思はれる。

又概して西が東に對しては平地に於いても多いといふことは、別に理由もあるらしい。西田西島といふが如きニシには、螺であつたものも

ないと斷言出来ぬ。西が日本民族東進に對して本族の故地の方向であるといふが如きことは、小聚落名に依つて決定は困難であるにしても、衰滅入寂といふ様なことが東洋民族の心を、その反對の現象より以上に捉へる傾向が、東よりも日の入る西をより多く思ふことが多いといふ様な點もあらう。

西を音讀したものは西川(小)^上西(神)などが珍らしい方で、西郷などは多いのである。

東西に關する古語は残つてゐない様である。強いて疑へば琉球語に近いもので、赤司(佐井)と入地(朝)とが各々東及西の義でないかと思はれるが、今の處他の意義あるものと考へてゐる。アイヌ語の西 *kes* に因るかと思はれるものに、今朝丸(井)といふのがある。之は可なり信ぜられるものであつて、その水上に上西^{カミシ}といふのがある。即ち今朝丸は、西の意あるアイヌ語 *ay* の轉、「今朝」に村の意の「丸」が附けられたものと思ふのである。上西と共に十樂元成

あたりに對して西と呼んだものかと思ふが、今朝丸は寶滿川の西岸でもある。

c 南

十五個中背振山地部に三個ある。

南山・下南(東)南山(小) = 南上淵・南檜崎・南有明(杵)
西南里(佐)南里ヶ里・乙ノ南里(神)南古賀・南中道(藩)南
新開・南五十丁(池)南野(山)江南(浮)(間線ハ對稱語北ヲ
作ヘルモノ)

杵島郡の前二者を山地性と見倣しても尙、平地の方が割合以上である。又山地に於いても、背振列が筑前に面する所には一つも南がないことになつてゐる。筑紫南面里と言ふのはあつても當儲せる用字であつて、南の意なきものである。同郡の南畑村といふのは、小城の南山村と共に政治的區劃の必要から生れた後世のもので別に扱はねばならぬ。之れ以外には一個も採し得なかつたといふことは、土地一般に北に斜下するが爲め、その傾斜に逆つて南伸する聚落の少いことを示し得てゐる事と思はれる。

肥前の山地にある南山(東)は玉島谷の南の意であつて之も南伸を示したものではない。下南は南山の下つ方である。平地部に於ける南有明も新しい村名で、聚落延長には關係ないと言へる。

肥前の平地には南里が多い。それに對して北里といふのは見ない。南里即ちナリは別義あるかも知らぬと思はれるが暫く字義に依るならば之も土地開發の方面聚落延長の大勢に因由すると見られる。即ちこの肥前の平野そのものが南に向つて發達し開發されて行つたものであり、従つて聚落名、地名も南伸したと考へられる。

d 北

三十五個の中南と相伴はないものを舉げると左の如きものである。

北崎・野北・北原・山北・北新地(糸)北浦・北川(小)北原・新
北(佐)北浦(三)＝北方・北移(杵)北坊(小)北島・北橋津・
北村(佐)北古賀(三)北島・北古賀・北牟田(瀨)北原(山)北
山・北島・北牟田・北長田・北田(八)

右の中三瀨の北古賀は前記同郡の南古賀と對

するものでないことを念の爲め附記して置く。
「南」よりは、平地部に比して山地部にも相當ある。糸島の數は八女と共に可なり多いのであるが、之には志摩山塊を加へてゐるので、北崎野北はさもあるべき地點である。

北の起りに、分一方の語から來て北字を假られるに至つたものがないとはいへない。野北、山北・新北など一應詮考すべきものと思ふ。

牟田には北・西のみで東牟田、南牟田といふものを見ない。それと同じく島にも南島が見當らなかつた。尙フィールドでは津留にも南がない偶然か知れないが、何か因由する所がありはしまいかと思ふ。兎に角北は南よりも多いことになつたのである。

南北の古語に就いては、津遊といふのが三井郡にあつて、耳繩山麓の聚落線から見れば、北方なる野の沖にある。ツイと言ふので鮮の古語ヲ即ち北の意でないかと示してくれた人がある併し露も方俗ツイと訛るし、その西の水の裕かでない川のあつたのをツイ川と言つてゐるから

もつと根據を得た上でないと採り難いことになる。鮮の古語^{叶四}に就いては後にアラの項に譲ることを許してもらひ度い。

この東西南北の外に十二支の方向詞がある。

之は明白に判明せるものは少かつた。そして動物名であるので別ち難いものがある。併し大抵正四方から外れるものが多くこの方法で呼ばれたのでないかと思ふ。牛、辰などにさう言ふものがあらうと思ふが、丑、辰位の方向は大方それ／＼北、東などで呼ばれ勝ちである。確かと思はれるものは乾―戌亥である。神崎郡の犬井谷は松隈あたりから言つて正しく乾に向ふ直線な斷層線谷にある部落である。その隣りのボロメキには反對に辰巳谷といふ用字がしてある。三瀧の大野島にある乾角は大角といふ渡場以北に於ける方形路―之は耕地の整理上から來たと思ふが―に於いて文字通りの乾である。或は中上にある鎮守から呼び出したものかも知れぬ。佐賀郡にも犬井道と言ふのがあるが之等の意味あるものと思ふ。

其他では三井の念島が子ノ島でないかと思はれるし、糸島の眞方が午方でないかと考へられるのである。

e 前と後

前後は最も初期の位置乃至は方向を示す言葉であるが先づマへから調べると左の如きものが擧げられる。サキは地形の部に述べる。

前峠(筑)前牟田(早)前原(糸)前田(小)門前(三)＝門前(杵)門前(小)前牟田(三)宮前、門前(諸)沖前(池)前津邊田ノ前、伊勢ノ前、前古賀(八)

後では後野(筑)＝沖ノ後(瀧)後ノ江(八)などがあるが後の部に入れねばならぬのに、尻、背などがある。背字を用ひたものはフィールドにはなかつたが、城字を當てたらしいものはある之は城の部に於いて研究を加へることにして茲に「尻」を擧げると

井尻、井尻(筑)＝城井樋尻(佐)田尻(池)溝尻、田尻(山)等

がある。右を見ると尻は後の意よりも末端の意に用ひられたものである。

或は廉原(早)は背原でないかと思はれるが斷じ難い。故に今眞に後の意と思はれるものは初めに擧げた三個といふことになる。「後」よりも「前」の方が多いといふ事は、地名を記す場合の心理も窺ふことが出來様と思ふが、前後といふことは地形及日射に關係あるものである。後者の支配に依り、多く東と南が前となる。之は家屋個々に就いて特に明らかである。そして前者即ち地形はその東又は南のいづれが前となるかを制限する様である。時としては地形の爲めに西、北なども前と呼ばざるを得なくさせられるのである。

又方向を指す場合の基準となるものには、山川自然の外營造物など種々であるが、神社寺院が特に然りである。神社の如きはそれからの鬼門に當る所、それから如何なる方向といふことは現に尙話題に上る位である。門前街の多いことは特に目に就くことであるが、その神社の向きと雖も尙地形と交渉を持つ様である。

f 左右、脇、横

左の用字は見なかつた右は右原(神)＝右原(小)があるが、之も或はウバラー大原・茨に當てたのかも知れぬ。小城の右渡には右の意はないのである。神崎の乙ノ馬手は面白いと思ふ。脇に就いては、脇田(筑)脇山、西脇(早)脇田(三)＝田脇(潜)等がある。

横は脇よりも遙かに多いがその代り「縦」に對する横が加つてゐる。側線を加へてゐるのが夫であると思はれる。

横峰・横手(筑)横内(早)横濱(糸)横田・横杜(東)横町(小)横馬場(佐)横田(神)横井(三)横隈(井)＝横手(并)横江(佐)横武(神)横溝(潜)横大(朝)

この横は山地部に遙かに多い結果になつてゐる。山麓などの横側といふ様な聚落位置が多いからでもあらうが、「横」といふものが傾斜に關係ある言葉でないかと思ふ。即ち傾斜の方向なる縦に對する横が多く加つてゐるわけであらうこの横は左右と同項にすべきものでなくなるわけであるが「縦」が地名になかつたので茲に一緒にして置くのである。

g 表裏内外出入

表裏に就いては糸島郡の川付の中に表川付といふのがあり、大字川付の中の大原などに對して直接川に接するからとも思へるが、川付字川付に對してこそ表川付といったとすれば、その思想は注意するに足る。何となれば目に向つて表と呼ぶのが普通である、即ち東か南である。せめては西もあるにしても、北は少いものである。ウラが下であることは古記に徴せられる所で、それから言へば表は上である。然るに東を上と連考したことは之もたしかで、日出の方向だからであらう。琉球の「アガリ」は之に關連せしめていゝと思ふのである。結極東は古來表と思想されてゐたものと思ふ。南も日射の最もよき方向で、家が南向きの多いことは東以上である。鮮で常に裏にある厠を *the Kan* 北間といふのもこの共通思想の表れと思はれる。然るにこの表川付は川付の北である。

何故に北を表としたかは茲では地形に據つて解決するより外ないことと思ふ。北に開き低下

する谷地にあるからである。

全郡に於いてはも一つ松國といふのが表裏に別れてゐて、そこでは西側のが表となり東の丘陵に入る所が裏とされてゐる。この松國及川付の例からその土地の地形が表裏の思想に如何に強い影響を及ぼすかを見ることが出来ると思ふ。即ち開放せる低野に向つて表とし反對に傾斜に逆ふて表と呼ぶことはない。「目」に依る表裏の思想は平坦部のことであつて、山間に於いてはそれよりも地形の方が却つて重く據られてゐると思はれる。

以上二つは山間であるが、平地部では三井に表といふのがあつて、南北に通ずる道路が關係を持つてゐる様である。神崎の猪ノ面^{モテ}は堰の表かと思はれるのである。これに就いてはオモテなる語の有する意味の範圍に就いて研究したいことがある。

「内」はかなり多いのであるが、古來谷の意に用ひられたウチと一緒に地形の部に述べることを許され度い。「外」はそれよりも少く、外野

(佐)土居外(三)外野、外開(瀧)等で皆平地にある。土居外と外開はそれぞれ土居内、内開と對するものである。前者は成富兵庫をして佐賀藩が築かせた天建寺放水路の土居により、内外に別たれたもので、人爲の自然短正が地名にも表はれるに至つたものである。外野のホカは方俗の用語野良の意即ち沖であるものと思ふことが出来る。

出入の方では作出などの出村を除くと、出羽(佐)洗出(筑)といふのが出の方のもので、入は入部(早)大入(糸)深入(東)＝入地(朝)と四つあ

る。この出入と言ふのは位置詞といふよりも地形に關係ある様になつてゐるのである。入部は脇山内野の入る邊であつて、大入は最初から音讀したか否かは疑はしいにしても配崎の陸繁島に抱かれた澳である。深入は玉島川の谷の又支谷の奥にあつて、字義明瞭である。入地は宮野村から金川村にかけての洪積地と、筑水の右岸即ち古毛、長淵あたりの高みとの間の低地であつて、二十米のコントロールはよく大勢を示し得てゐる。即ち窪み入る意味の入と考へる。

アビシニア國王に謁するの記 (一)

小 牧 實 繁

一九二九年五月、巴里大學土俗學研究所が第一回先史時代遺蹟踏査舉行の計畫を發表するや余は直ちに全大學地理學研究所の第三階を占領

する土俗學研究所の助手リヴェー女史(アメリカニスト Rivet 博士の令妹)の許まで參加を申込み幸、快く許可せられたのである。